

カトリック八尾教会ニュース



2023年10月
Tháng mười

【今月の予定】

ミサの時間

1日(日) 年間第26主日 7:00

10:00

小教区評議会 (10時ミサ後、ホールにて)

8日(日) 年間第27主日 7:00

10:00

9日(月、スポーツの日) 13:00

大阪高松大司教区設立式とトマス・アクィナス
前田万葉新大司教着座式 (玉造聖マリア大聖堂にて)

14日(土) 初聖体勉強会 14:00

聖書の集い 16:00

15日(日) 年間第28主日 7:00

10:00

ベトナム語のミサ 15:00

インターナショナルデー 11:00

玉造聖マリア大聖堂にて

22日(日) 年間第29主日 7:00

世界宣教の日(献金) 10:00

子どもとともにささげるミサ

故ラファエル松本武三神父様(2017.10.24)追悼

29日(日) 年間第30主日 7:00

10:00 「教区典礼研修会」14時~サクラファミリアにて

【平日のミサ】木曜日 10:00

(5日、12日、19日、*26日はお休み)

【お知らせ】

◎大阪高松大司教区設立式とトマス・アクィナス前田万葉新大司教着座式(10/9)

◎インターナショナルデーミサ(10/15)

→両日ともにカテドラルの駐車場は使えない為、公共交通機関をご利用ください。

■ロザリオの祈り

教皇フランシスコは全世界のカトリック信者に向けて、10月の「ロザリオの月」の間、毎日「ロザリオの祈り」を唱えるよう呼びかけています。

教皇はカトリック信者に、「神の民としての交わりと悔い改めのうちに一致して、私たちが神から引き離し、仲たがいさせようと絶えず試みている悪魔からの保護」を願い、「神の聖なる母と聖ミカエル大天使に祈る」よう促しています。

教皇は「ロザリオの祈り」の最後に、古来の聖母への祈り「Sub tuum praesidium」(スブ・トゥウム・プレシディウム)と、悪との闘いでの保護と助けを願って「大天使聖ミカエルに向(むこ)う祈り」を唱えるよう勧めています。

教皇はマリアに教会の保護を願って祈ると同時に、「教会がその罪と過ち、現在と過去に犯した虐待をより深く意識し、悪がはびこらないように、ためらいなく闘う決意を固める」ことも願っています。

(カトリック中央協議会H.Pより)



ミサのため、お御堂の階段を上る所に、あなた達3人が座っているのをよく目にする。

この前、道を空けてくれるように詰めてもらった時、わたしの頭をよぎってくる出来事があった。

コロナウイルスと付き合っ3年以上が経ち、世界の人々は疲れのあまりに、もうそのウイルスと付き合い合っていくしかないことに気づき始めた。それに、その間の闘いによって、敵の正体がかなり分かってきたこともあっただろう。結局、インフルエンザと同じような対応をすることになった。つまり、恐ろしいばかりのあのコロナ禍は終わった。正確には終わったのではなく、終わらせた方がより妥当な表現だろう。よって、八尾教会も徐々に通常のミサの形を取るようになった末、主日の朝7時と朝10時とでミサを捧げるようになった。ミサの通常と言えば、侍者の奉仕するミサをイメージする方が多いし、子ども達に司祭の隣りで手伝ってもらうのは教会共同体にとって決して悪いことではない。それで、あなた達少年3人組が侍者デビューをした訳だ。初回かその次回かは確かではないが、ある主日の朝10時のミサ後、あなた達に怒ったことがあるのをよく覚えているだろう。怒る時に声を上げたり、興奮したりはしないよ、わたしは。しかし、論理的に且つ冷静に語りかけるような言い方こそ、あなた達にとって馴染みのないもので、それこそ、返ってもっと緊張させる要因だったかなと思う。叱りの内容は、「やるかやらないかは全く自由だが、やるならしっかりとやりなさい。落ち着いた人は頼りになる」。要は、静かにすることの大事さを、ミサ直後、香部屋であなた達3人を前にして論じたのだ。緊張した表情で聴いていたあなた達が帰って行った後、一つの気がかりを感じ始めた。あまりにも真剣に怒ってしまったことだった、子ども達を相手に、という。子どもは無限の可能性を持っていると言われる。将来、何になるか、何をやるかがまだ決まってないため、希望を託せる存在としての意味合いだろう。だが、わたしは、そうとは思わない。何故なら、一日は川に置いてある飛び石のようで、ちゃんと気を付けて、目の先の飛び石に足を置き、次の飛び石を目掛けて集中して足を動かさない限り、川に落ちてしまう。つまり、迎えるべき明日ではなく、より劣った一日がやってくることになる。言い換えると一日を過ごした丁寧さにより、明日の中身、その質が変わるわけなのだ。と、わたしは思うし、そのつもりで生きている。ここで、改めて、あまりにも真剣にあなた達を叱ったことを思い出す。真剣という言葉やそういった態度が嫌いではない。いや、むしろ大好きだ。何故なら、物事を進めた結果として、よい実を实らせるために必要な肥しは、そこにとことん打ち込めるか否かの真剣さだと思うから。しかし、言うだろう、人々は。ずっと真剣さを保てるわけでもないし、時にはリラックスが必要だと。ごもつともである。リラックスも、真剣にやるわけだ。こういう生き方は、至るところ、どうなるのだろう。そう。聖人なのだ。知ってはいるが目指す人は少ない。いや、バカにされる生き方だろうが、この類のバカが教会の歴史上いっぱいいたのだ。

少年3人組よ、正しくあれ！

